明治大学外国人研究者招聘制度　報告書

＜招聘教授・研究員の情報 / Guest Professor・Guest Scholar＞

氏　名 Name	Angeliki Lymberopoulou
所属機関(派遣元) Affiliation (Home Organization)	The Open University
現在の職名 Position	Senior Lecturer
招聘期間（日本への入国日から出国日） Invitation Period (from the date of entry to departure)	2026年5月4日から2026年6月13日
専攻 Field of Research	Art History
ホスト教員氏名と所属学部研究科等 Name of host teacher and affiliation at Meiji University	商学部　瀧口美香

＜外国人研究者からの報告 / Foreign Researcher Report＞

①研究課題　/　Research Theme

クレタ島のビザンティン聖堂装飾の図像額的研究

②研究概要　/　Outline of Research

クレタ島には1000を越える聖堂が現存し、他に類のない豊富で膨大な量の視覚情報を提供していることから、ビザンティン研究者らの熱い注目を集めているフィールドである。

ゲスト（外国人研究者）とホスト教員との共同研究は、クレタ島の聖堂を対象として、これまで明らかにされることのなかったビザンティン聖堂の図像に埋め込められた死生観、終末観の重層性を解読することを目的としている。共著でクレタ島の未発表の聖堂に関する研究書を刊行することでも合意している。

本共同研究は、ビザンティンの死生観にとどまらず、神学論争、当時の社会構造（寄進者の社会的地位）、経済活動が壁画制作に与えた影響に着目し、ヴェネツィア支配下のクレタ島における異文化融合の実態を明らかにするという発展性を有する。

ビザンティン聖堂の壁面を装飾する十二大祭図像（キリストの生涯を表す連続説話場面）が、聖堂内においていかに重層的・相互関連的に展開し、信徒を救いの道へと導くための手立てとして機能しているのか、図像学の手法に基づいて解読していくことが共同研究のテーマであるが、今回の招へいでは同テーマについて深く議論する機会を得た。

「地獄草紙」や「飢餓草紙」（死体を描き、肉体の不浄や無常を観想するもの）など、日本美術史には独特の死生観の表象が見られる。ビザンティン帝国とは地理的にも宗教的にも遠く隔たった日本の美術ではあるが、ゲストは日本の博物館でそれらの作品を実見し、ビザンティン図像をとらえ直すきっかけとなったと語っている。

③招聘期間中の研究活動の実績　/　The research results as Guest Professor・Guest Scholar

5月4日　羽田空港にて出迎え、今後のスケジュールの確認（打合せの日程）を行った。
5月9日　上野のホテルから生田ゲストハウスに移動するタイミングで、生田キャンパスを案内し、ライブラリーカードや図書館の利用について案内した。同日、生田から駿河台に移動して、キャンパスを案内した。駿河台では、早稲田大学の益田朋幸教授を交えて研究の打合せを行った。
5月16日　梅が丘の茶室に案内して茶道を体験してもらい、午後は研究の打合せを行った。
5月17日　娘さんが来日するタイミングに合わせていっしょに羽田空港に出迎えに向かい、そこで研究の打合せを行った。
5月23日　早稲田大学で、シンポジウムを開催した。招聘研究者の基調講演1時間と、ビザンティン研究者6人によるプレゼンテーション、活発な質疑応答が続く、有意義なセッションとなった。
5月31日から6月6日まで、長崎、広島、京都、奈良への調査に出かけた。
6月8日　出版打合せのため、都内の出版社を訪れた。
6月9日　最後の打合せを行い、今後のリサーチや出版のスケジュールについて確認した。